

熊本城の重要文化財建造物

熊本城調査研究センター 所長 渡辺勝彦



1. はじめに

熊本地震に被災へのお見舞い

2. 天下の名城熊本城の建築 林立する天守・櫓

宇土櫓、他の櫓群を含めた建築群の評価；本丸を中心に周囲の曲輪まで展開して林立する櫓群は、日本城郭建築史上特筆される空間であった。その構成を知りうる貴重な建築群である。大建築が並び立つ様は、類例がなく、天下の名城と実感。

石垣と一体の美；天守・宇土櫓・東十八間櫓・北十八間櫓・平櫓・監物櫓

ただ、江戸時代に建築工事を担当した作事所が焼け、建築図面や資料があまり残っていない。熊本城全体の建築平面をよく示すのは、江戸時代中期明和年間の指図、狩野家が昨年寄贈下さいました(木下泰葉「御城内御絵図」熊本城調査研究センター年報 1)。

熊本城の全体はどうだったのか。→富重写真館の写真、「肥後の里山ギャラリー」の展覧会「富重写真所開業 150 年 利平と写真」。最初の 1 枚の写真が明治初年の熊本城の全体をよく映していた。建築空間の点からは、城郭建築、特に櫓や塀は、例えば本丸の外から見た場合と本丸の内側から見た場合で大きく異なっているのに気づきます。

宇土櫓に注目。その形の特徴を藤岡先生が指摘されています(藤岡通夫『熊本城』)。天守の屋根は弛みがあり、破風も反っていますが、宇土櫓は屋根に弛み、反りがなく直線的、平面的になっている点です。熊本城では他の櫓も直線的な屋根になっています。

3. 三の天守=宇土櫓

宇土櫓はよく残ってくれました。まず、保存の歴史(一国一城令、明治の廃城令、昭和 2 年の修復)、明治の廃城令のあと各地で保存の動きが少しずつ出てきます。

宇土櫓は「三の天守」とも呼んでいるようです。建築史の研究者も、天守級(初期望楼型)(内藤昌『城の日本史』1979)と呼び、現存天守の比較に天守と見なして宇土櫓を加えています(西和夫『松江城再発見』2014)。単なる着到櫓、城に着いたことを見張る櫓と比べると、形態の違いが分かります。岡山城月見櫓の例を見ましょう。石垣の内側は、岡山城の場合が住宅風に解放しているのに対し、宇土櫓は石垣の外から見たのと同様の意匠です。

平面は、1 階平面の西側の廊下部分が、幅がこちら側が狭くなっています。石垣の出隅が平面上直角でないからです。これは古い石垣にはあったことで、安土城天守、岡山城天守にも、後で述べます彦根城天守の前身建物にも。

北野さんがまず城全体の造営経過を検討し、慶長 4 年(1599)頃本格的な築城の工事が行われていたこと、西出丸の乾櫓が慶長 7 年完成しており、本丸の天守・櫓もこの頃完成していたと明らかにされています。(北野 隆「熊本城の宇土櫓について」建築学会論文報告集 308 1988 年)

宇土櫓は、遡って城戸先生が宇土城からの移築したものでなく、宇土櫓との呼び方は江戸時代

中期からと昭和 18 年に発表。北野さんはその経緯を、『肥後録』という資料と絵図に見える櫓の順序から、加藤平左衛門屋敷周りの櫓につく宇土の呼び名は、平左衛門丸が宇土関係の役所であったことに因むとされました。

城郭建築には、前身建物の由来を示す名称がしばしば付けられております。名古屋城西北隅櫓が清洲櫓とも。福山城の伏見櫓なども。

解体した部材を使う; 宇土櫓にも古材が多くみられます。どこからか持ってきた可能性は高いとされております。平成 2 年の修理工事報告書では、「宇土櫓は、加藤清正が慶長 3 年から 5 年に築城した第二次熊本城の天守」としています。

他の建物の材料を使ったことは、しばしばあります。彦根城天守は、大工が屋根の部材に慶長 11 年と書き残しています。また、修理工事で前身建物の番付が見いだされ 1 階の平面まで分かっています。五重の天守を三重に縮めたので、破風が多くついた独特の外観になったと考えていいと思います。

二段づつ重ねる; 宇土櫓の構造はどうか、初期の天守の構造。2 階ずつ 3 段に重ね。

さらに展開すると、自在に通し柱を使って、名古屋城天守のようないわゆる層塔型、タワー型のデザインが生まれます。構造技術とデザインは、一体となって発達したと理解できます。皆さんが、直感で美しい、見事だと感じる建築には、裏付けとなる高い技術があるはずです。

続櫓; 宇土櫓の南には続櫓が続き、その南端には二階の櫓。続櫓は西面に 1 カ所石落しを張り出す。金沢城の石川門の左側にこれは塀ですが、途中で石落とし、同様の意匠。



4. 高石垣に連続する多間櫓群と門塀

熊本城には、本丸・二丸に、平屋で入母屋造りの櫓が数多く設けられていました。そのうち東竹の丸には、田子櫓をはじめ七間櫓・十四間櫓・四間櫓、ちょっと離れて源之進櫓。その北には東十八間櫓・北十八間櫓・五間櫓、さらに離れて平櫓が残っています。下から見上げますと、高い石垣と一体で見事な形をつくっています。明治初年の古写真を見ますと、よく分かります。

石垣の上に細長く続く多間櫓は、江戸時代に法隆寺の大工今奥政隆が編纂した『愚子見記』第 5 巻によれば、松永弾正の

多間山城に由来します。当時一流の大工が愚子とへりくだり、「気遣いは分別のイロハ」と認めています。

多間櫓や塀は、城郭建築としては主要のものではなく、意外に残っていません。姫路城の化粧櫓、続く渡櫓は、隅櫓と組まれ好例です。熊本城の十四間櫓・東十八間櫓などは、これに並ぶものです。高い石垣の上に聳える姿は、多間櫓として随一でしょう。屋根を本瓦葺き、壁を漆喰で塗り込め、腰に下見板を張る。重厚な感じの櫓群です。

四間櫓から少し離れて、**源之進櫓**があります。直角に曲がる一重櫓で、両方の隅に石落としをつけています。昭和 55 年の修理工事報告書によりますと、古い軒瓦は不開門に保管されている元禄 5 年(1692)の瓦と似ていて、元禄期には少なくとも遡ります。安政 6 年(1859)年には大修

理(棟札)。

さらに北に離れて、東櫓御門のあったあたりに、東十八間櫓、北十八間櫓、五間櫓がつながっています。高い石垣の上に聳える姿は、熊本城の壮大なスケールを見事に示しています。残念ながら、この辺は、今回の熊本地震で石垣が大きく崩れ、櫓も落ちてしまったところです。

東十八間櫓は、内側も石垣で細長く一直線につくられた櫓の下は三方が石垣の上に載っていました。東櫓御門はこの裏に設けられていました。文久元年(1861)の棟札などが見出されており、この時、大改修あるいは再建。

さらに、一段下がって北十八間櫓が東北の隅に折れ曲がって位置しています。北十八間櫓も東十八間櫓と同時期に立て替えられたと推測されています。

平櫓 東側は平面上鈍角の石垣から三角形に張り出して、建物を直角に作り、軒を二重にしています。石落としにしているわけですが、石垣の隅が直角にできなかった頃、石垣から張り出して建物を自由につくる工夫です。

二の丸の最も北にある**監物櫓**は、寛永 11 年(1634)の絵図には存在していたようです。元禄年間の瓦が残っていますが、安政 7 年 1860 に大修理。

熊本城の多聞櫓は昭和 20 年代の修理工事が行われ、その時の記録がございます。調査研究センターが昨年度まとめました熊本城跡総括報告書に、載せています。幕末に建て直されたものが多いのですが、わが国の代表的な多聞櫓です。

門と塀は、そのほとんどを失っています。**不開門**は石垣の間に門、上に櫓をのせる櫓門です。屋根の左側は入母屋ですが、右は切り妻、右側に多聞櫓がつながっていました。

熊本城**長塀**は、その名の通り長くて、しかもほぼ真っ直ぐです。寛永 11 年までは花畑屋敷への橋の箇所であっていたそうで、この年に塞いで連続した塀になったとのことです(北野隆「長塀」『建築史基礎資料集成』)。壁が真壁で、腰を下見板にしています。この長塀は、城郭の存在を示す上でよく効いています。昨年(2016)の台風で 41メートルの強風に西半分が傾き、地震で残りの半分が倒壊。石の控柱は形が数種あり、何度も修理。

5. 精緻な外観復元と高い水準の構造＝復元天守

昭和 35 年の天守復興。

古写真と平面図を基に忠実に復原設計、藤岡自身による原寸図で正確な外観復元、
ハイブリットな構造 SRC+RC+S 杭内に潜って底の安定地盤を確認
現在は震災から復興のシンボル

6. おわりに

終